



Title	卷頭言
Author(s)	小倉, 正恒
Citation	懷徳. 1951, 22, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/90240">https://hdl.handle.net/11094/90240</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 卷 頭 言

戰火に荒廢した大地に復興の槌が響く時、いよいよ仰がるものは道義の不滅であり、文化の光輝である。顧みれば二百數十年の昔、我が懷德堂は創立當初より、聖經賢傳の講究を以て基とし、進んでこれを修身・齊家・治國の實際に應用するを以て宗旨とした。降つて明治・大正の交、懷德堂記念會の設立さるるや、遙かにこの傳統を承けてこれを新時代に生かさうとした。即ち東洋文化の淵源を探求するを以て宗旨とし、進んでこれを實際に應用して、以て人類道義の向上に資するあらんとして今日に至つたのである。思ふに懷德堂の學は、この様に終始不滅の眞理を含んだ高邁なものであつたが、それと同時に實地の經營に即したいはゆる實學であつて、この點は商工都市大阪に發生した特異なものであつたと言ふことが出来る。今次の大戦に際會して、不幸戰火を被つて會館は焼亡したが、それは決して堂の精神が滅亡したことを意味するものではなく、かへつて新しい時代と共に形態こそ改まれ、不滅の精神はいよいよ輝きを増すことの象徴に外ならない。私は將來大阪の商工業が發達することを冀ふと共に、それに伴つて本堂の精神を益々發揚せしめ度いと考へる。これ、今春以來専門學者に請うて講座を設置し、以て文化事業再興の端を開いた所以であり、今また本誌を復刊して事業の存在を内外に明示せんとする所以である。一言所見をのべて卷頭の辭とする。

理事 長 小 倉 正 恒

